

2021年11月6日

年間第32主日

菊地功大司教 メッセージ

列王記は、貧しい一人のやもめと預言者エリヤとの出会いを描きます。貧しさと飢えの中でいのちの危機に直面する女性に、エリヤはそれでも施しをするようにと迫ります。しかし、いのちを賭けたその施しの業、すなわち犠牲の業に、豊かな報いがあったことが記されています。

マルコ福音は、有り余る中で見せかけばかりに気を取られる律法学者の姿との対比の中で、イエスが、貧しいやもめが「乏しい中から自分の持っているものをすべて」神にささげた行為を評価した話を記しています。「生活費を全部入れたからである」と述べることで、イエスはこの女性の信仰が、まさしく自己犠牲の上に成り立ったいのちがけの信仰であることを明白にします。

ヘブライ人への手紙は、わたしたちの大祭司であるキリストは、この世の聖所に鎮座する存在ではなく、あがないを成し遂げて、御父のもとで執り成してくださっていると強調します。その上で、人類に対する神の愛は、まさしくいのちがけの自己犠牲によって具体的に表されたと指摘します。

わたしたちの信仰は、あたかも趣味のように、余裕があるから身につけるようなものではなくて、いのちがけで全てを神にゆだねる自己犠牲によって成り立っています。それは主ご自身が、わたしたちのために、まさしくそのいのちを投げ打って自らを神にゆだねたからに他なりません。わたしたちは、どのような覚悟で、何を犠牲にしてこの信仰を生きているのでしょうか。

「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」と、マタイ福音に記されていました。信仰が、余裕があるから身につけるたしなみではないように、わたしたちの愛の行動も、余裕があるから行うものではありません。助けを必要としている人たちに、力を尽くして愛を実践す

る教会共同体でありたいと思います。

教会は今、シノドスの歩みとともに歩んでいます。聖霊に導かれて、これまでの教会の歩みを振り返り、現代社会にあって教会がどのようにあることを神が望まれているのかを、一緒になって見出していこうとしています。

シノドス開会ミサを翌日に控えた 10 月 9 日に、バチカンで行われたシノドスに向けた集いにおいて、教皇様は、シノドスは司牧的回心のための大きな機会である一方で、いくつかの「リスク」も抱えている、と指摘されました。それは、このシノドスの歩みを中身の無い表面上のものにしてしまう「形式主義」、高尚だが概念的で世界の教会の現実から離れた「主知主義」、今までどおりでよいと考え何も変える意志がない「現状維持主義」の三つのリスクであります。

その上で教皇様は、今回のともに歩む旅路が、無計画にではなく「構造的に」歩む可能性を、また皆が教会を自分の家のように感じ、誰もが参加できる場所となるために「耳を傾ける教会」となる可能性を、さらには兄弟姉妹の希望や困難に耳を傾けることで司牧生活を刷新し、「寄り添う教会」となる可能性を与えていると指摘されます。わたしたちの教会はどうでしょう。

教会のこういった呼びかけに積極的に応えることは、思いの外面倒ですし、さまざまな犠牲を伴います。出来れば誰か余裕のある人に取り組んでほしいものだと思われるのかも知れません。しかし第二バチカン公会議に始まった教会の回心の道は、まだまだ途上であることを感じさせられる出来事が相次いでいる昨今、教会は自らのあり方を振り返り、神の導きに従う存在とならなくてはなりません。余裕があるからではなくて、すべてをかけて神に身をゆだね、自己犠牲の心を持って互いの命を守り抜き支え合う、奉仕する共同体となる道を歩みましょう。